

まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん

まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん まじすこどもえん



2022年度 年主題「つながって～今、わたしを生きる～」

0・1・2歳児 7月主題 「きもちいい」

月のねがい

- ◎保育者の祈りやさんびかに親しむ。
- ◎保育者に汗を流してもらって、気持ち良いと感じる。
- ◎砂や水に触れてその感触に興味を示す。
- ◎さんびかを喜んで歌う。
- ◎保育者との関わりの中で自分の思いを知る。

3・4・5歳児 7月主題 「あらわして」

月のねがい

- ◎お休みの友だちや自分の身の回りのことを覚えて祈る。
- ◎保育者や友だちと一緒に遊ぶ中で、色々な思いを表すようになり、葛藤も経験する。
- ◎ことば・歌・体で、(主を) 賛美する。
- ◎絵本やお話や歌などに親しみ、イメージ(想像の世界)をふくらませる。



サークルタイム

さて梅雨も明け、1学期も残すところ1ヶ月となりました。子どもたちは、裸足になって園庭を駆け回っています。アミやかごを持って虫とりに出かけたり、水を使って涼みながら遊んだり、それぞれ好きな遊びをたっぷり楽しんでいるところです。

5月頃からのぞみ組では、朝の礼拝の後に5分程サークルタイムをしています。サークルタイムとは、子どもたちが円形に座り、各々テーマに沿って発表したり、友だちの発言に耳を傾けたりする時間です。なぜこれに取り組んだかということ、おしゃべりは大好きだけど、人前になると、中々自分の言葉が出てこず固まってしまう、動けなくなってしまう姿が多く見られたので、自分の言葉で伝えるきっかけ作りをしたいということで始めました。先生たちも初めてだったので、一緒に子どもたちが発信しやすいような形を作っていくことから始めてみました。

まず始めは、好きな食べものや好きな動物、色、おもちゃなどの好きな物シリーズから始めました◎当然、当初は発言が好きな子たちが中心でしたが、回を重ねるごとに手を挙げる子も増えてきました。今では、ほとんどの子が手を挙げて、嬉し恥ずかしそうに話しています。年長児にいたっては、「ぼくは〇〇が好きです！何でかっていうと、〇〇だからです！」と、理由まで伝えてきます。それを聞いていた年中児も真似をし始め、少しずつ盛り上がってきているようです。

保護者の方からも、『「明日のサークルタイムで、〇〇って言うちゃおうかな～」って言ってます(笑)』など、家での様子を教えて頂いたりして、職員も「嬉しい姿だね！」と喜んでます。苦手な子は、「嫌だな～」ときっと思っていることではと思うが、無理はしないで、その子が動き出せるのを待ちます。子どもたち自身で自分の気持ち(嬉しい・悲しいなど)や考えを相手に伝えたいと感じるきっかけになればと願っています。人前で話したりすることは、大人でも苦手なことで困難なことだったりします。のぞみ組の活動の姿を見守り、その主体性の変化を楽しみにしていきたいと思ひます。

主任

今月の聖句 「見よ、私は新しいことを行ふ。今、それが芽生えている」

イザヤ43:19
人類が誕生したのはいつか。この問いに対して、最も古い年代設定は500万年前(アウストラロピテクス/猿人) ですが、180万年前(ホモ・エレクトゥス/原人) という人もいれば、20万年前(ネアンデルタール人/旧人) という立場もあります。最も早い年代設定は4万年前(クロマニオン人/新人) ですが、これらは全て仮説であって、歴史以前を示す先史時代(人類がまだ文字を持たない時代)の話です。人が文字を持つようになってから「歴史」という概念が始まりましたが、それもせいぜい紀元前3千年前の話です。地球が生まれて46億年、その中で、私たち人類の歴史は、たかが5千年余りしかないのです。

幼い頃、私は一日が長く感じて仕方がなかったのを思い出します。けれども50歳半ばを超えた今、あっという間に一日が終わってしまいます。心理学者は、それは私たちの経験値が違うからだとして説明します。子どもの頃は、経験すること全てが新しいことで、驚きの連続で、新鮮な日々を送ることが出来る反面、そういう出会いがないと、一日が長々～と感じてしまうのだそうです。大人になると、ある程度の経験値が増えるので、驚きや、新鮮味が減少するので、時間を短く感じてしまうとのこと。これをどう理解するかは、人によってまちまちでしょう。子どもたちにとって、生きることそのものが新しいことの連続です。彼らはチャレンジャーそのものです。もうそれが芽生えている年齢です。大人はしっかりと、その子どもたちをサポートし、新しい発見に歓喜出来るよう見守り支えたいものです。

協力牧師 池田基宣



7月の行事予定

1日(金)	海遊び(2・3才児)七夕訪問
4日(月)	七夕訪問(3才児)
5日(火)	海遊び(4・5才)・弁当日
9日(土)	お泊まり保育(年長児)
12日(火)	誕生会(5・6月生)
13日(水)	歯科検診
20日(水)	市営プール(3-5才)・弁当日
20日(水)	一学期終園式
30日(土)	お祭りごっこ

8月の行事予定

1日(月)	夏季保育
6日(土)	職員園内研修
13・15日	弁当日
19日(金)	夏季保育・誕生会(7・8月生)
27日(土)	めぐみ誕生会(7・8月生)

からだの育ちとことば

子どもが誕生して最初に聞いた言葉、またお母さんが最初に話した言葉は何だと思ひますか？我が子が誕生した喜びを親としてどんな言葉で表現したでしょうか。喜びと期待を胸に、「どうか健やかに育ちますように。」と、子どもに全神経を傾けていった日々だったのではないのでしょうか。

そんな親の気持ちを肌で感じ取り、子どもは成長していきます。からだの成長に伴い、からだの可動域が広がりを見せていく中で、言葉を獲得していきます。その獲得には、お母さん、お父さんの関わりが大きいということはいまでもありません。

- 【話す力と言葉を育むために】
- ・タイミングの良い対応・・・会話の基礎
 - ・やり取り遊び・・・いないいないばあ～など
 - ・音を言語化する・・・「ブー」「そうだね、車だね」
 - ・うたいかけ・・・メロディーを伴うことばを好む
 - ・名称の提示とわかりやすい表現・・・「これ何？」に分かりやすく応えてあげる

- ・矯正・訓練・指導はさける
- ・ことばがけの配慮・子どもの気持ちをくみとる



R4年6月4日(土)
熊毛地区幼稚園協会 教職員研修大会
6月4日は屋久島で職員研修会が行われました。今年の研修テーマは「子どもの主体性がいきる保育者の関わり」です。保育者は、子どもが自ら持つ「やってみよう！」「どうしてだろう？」という気持ちを察知すること、また、年長児には、それを自分のことばで伝えられるように日々の園生活での経験を積んでいくことが大切であることを学び帰ってきました。子どもたちの話す力を育むことで、社会に出た時、自分の気持ちを整理し、ことばにして伝え、世界を切り開いていける子どもたちになってほしいと願っています。

園長

安心感の輪

静かになった園庭を歩いていると、あまりの日差しの強さに「もう夏休みに入ったんだっけ？」と錯覚を覚えてしまいました。梅雨空の続く日々が早く終わったのはいいのですが、その分、今年は猛暑日が長く続きそうな気がします。コロナにも注意が必要ですが、バランスの取れた暑さ対策も大事ですね。

礼拝でよく話す聖書のお話「岩の上の家」があります。砂の上に建てた家は洪水や大風になすすべなく倒れてしまいます。不安定な砂を土台にして上屋を建てたから当然です。反対に、岩の上に建てた家は洪水や大風にも大風にもビクともまじまじませんでした。安定した土台は、洪水にも大風にもビクともまじまじませんでした。建物で最も大切なのは「土台・基礎」でしょう。植物で言えば「根っこ」の部分ですね。乳幼児期の発達はその人の土台になります。当たり前のことですが、しっかりと土台にはしっかりと建物が建てられるわけです。

コロナ禍の下で、その土台形成に必要なはずの緊密なアタックメントの経験が薄まっていくのではないかと不安の声も耳にします。確かに、感染予防のために、身体的な接触にいくらか制限がかかるのでしようが、そもそもアタックメントとは、単なる身体接触やスキンシップとは明らかに区別されるものなのです。ジョン・ボウルビーという児童精神科医は、親や保育者などの養育者は、小さな子どもにとって「安心の基地」あるいは「安全な避難所」としてあるべきだということを強調しています。子どもは感情の崩れがなく落ち着いている時には、養育者を「安心の基地」として、そこを拠点に活動の範囲を広げ、いろいろなことにチャレンジしながら思い切り遊び、探索や冒険を楽しむことができます。そして、この基地がしっかりとあれば、子どもは自然と自律的に学ぶこともでき、また自分一人でも何かができるという自信にも繋がるのではないのでしょうか。遊び疲れたら、何かにぶつかって痛い思いをしたら、自分の思い通りにならなかったら、そして、恐れや不安といったネガティブな感情が生じると、今度は、あそこに行けば必ず慰めてもらえるはずの「安全な避難所」に一目散に駆け込もうとするのです。そして、そこで養育者にしっかりとくつき(アタックメント)、安心感を取り戻し、感情の燃料補給を済ませると、再び養育者を「安心の基地」として勇敢に外へと出て行くこととします。小さな子どもの日常は、こうしたことの繰り返しだと言えます。東大の遠藤利彦教授は、こうした繰り返しのあり様を「安心感の輪」と呼び、子育てや保育の基本は特に難しいことではなく、「安心感の輪」を育ててや普通の子どもに経験させてあげることなのだと言われます。ただ基地や避難所は、基本的にはどっしりと構えてあまり動かないものだと言われます。子どもは自律的な活動を背後から温かく「見守る」こと、そして「応援する」ことが大切なのです。

海や川、山や野原で走り回り、カニや小魚やカブトムシを追いかける。時にはロケットが飛んでいく姿を見上げる。どうぞ宝物のような瞬間を皆さん楽しんでください。この夏も子どもたちと共に暑さを乗り切つてまいりましょう。

学園長